



Kirill Petrenko conducted "Das Rheingold" and "Die Walküre" from "Der Ring des Nibelungen" in Bayerische Staatsoper

REPORT

キリル・ペトレンコの 《指環》ツィクルス

バイエルン州立歌劇場《ニーベルングの指環》から

取材・文 中東生
Text=Shinobu Nakai



〈ラインの黄金〉から。ヴォータンを歌ったコッホ(左)とフリッカ役のグバノヴァ ©Wilfried Hölzl

今年が第一次世界大戦終結100周年、同時にいま現在のバイエルン州立歌劇場となって100年でもある。また、主要会場であるナツィオナルテアターが1818年に建てられてから200年となる。その記念年で最も注目されている公演が、音楽総監督キリル・ペトレンコによる《ニーベルングの指環》(全4作)だ。ここではその前半「序夜《ラインの黄金》」と「第1日《ワルクユーレ》」のもようをご紹介します。

歌劇場の看板演目

2018年のスタートを飾る演目として劇場がイチ推しなのは、キリル・ペトレンコが指揮する《リング》再演だ。アンドレアス・クリーゲンブルクによる演出は、2012年にケント・ナガノ指揮でプレミエ上演されたものだが、ワーグナーのオペラに心血を注ぐペトレンコに受け継がれてから、当劇場の看板演目になっている。

エキストラたちが主役となった「序夜《ラインの黄金》」

まずは、客席への扉が開くと、舞台上ではすでに、全員自服のエキストラたちが食べたり、歓談したりしている。開演時間になると何気なく服を脱ぎ、肌色の下着の上から青色塗料を塗り付け、ライン川と化していく。それに寄り添うように、そっと始まった音楽は次第に盛り上がり、泡立つライン川を描写する。ペトレンコはオーケストラで細かな音楽的表情も描き出すと共に、歌手の子音裁きもその表情の中に組み込み、最初から最後まで高い緊張感を保ち続けた。個人的には、ワルハラ城へ向かうテーマで、その

緊張感を解き放してもらいたかったが、スリル満点な2時間半だった。

それほど張り詰めたペトレンコの音楽

作りには、傑出した歌手は不要なのかもしれないが、声が伸びなかったヴォータンのヴォルフガング・コッホや女性歌手らの存在感が薄かった。アルペリヒのジョン・ラングレン、ミーメのヴォルフガング・アブリンガー、シユベルハツケ、ローゲのノルベルト・エルンスト、ドンナーのマルクス・アイヒエ、フロアのデイン・パワー、ファフナーのアイン・アンガーらは光っていたが、舞台上の一番の主役は、変幻自在に活躍したエキストラたちではないか。それをペトレンコが尋常でないパワーで率いるバイエルン州立歌劇場管弦楽団が底から支える、真の総合芸術「楽劇」であった。(1月11日所見)

「第1日《ワルクユーレ》」は豪華な歌手陣の饗宴

《ラインの黄金》で芽えなかったヴォルフガング・コッホが病気のため、アルペリヒを歌っていたジョン・ラングレンが代役を務めるというプレス・メールが送られて来た。多少の不安を抱えて劇場へ向かった。一種の魔術的な演奏だった「序

夜」とは打って変わって、エネルギーで現実的なオーケストラは、この物語が人間界で展開されるということを提示しているのだろう。霧雨の中の戦闘シーンの後、上から降りて来るフンディングの館は、戦士の遺体処理所という設定で多くの女性エキストラが暗躍する。クリーゲンブルク自身が語るように、「ト書きを忠実に再現するよりも、ワーグナーが意図したと思われる各シーンの雰囲気を作り上げる」のに効果的で、かつ絵画的にも美しかった。

最高音域に達すると、声のポジションを開きすぎて叫びになってしまいう以外は、艶やかな声で能動的なジークリントを演じたアーニャ・カンペは、終演後バイエルン宮廷歌手の称号を与えられたが、その称号にふさわしい力演だった。対するジークムントのサイモン・オニールも、中間部のポジションを全開させるため明る過ぎる部分もあるが、始終輝かしい声を聴かせた。フンディングのアイン・アンガーは今までに聴いた



カーテンコールに応えるキリル・ペトレンコ。《ラインの黄金》から ©中東生

役の中では最適で、3人が満足な第1幕を創り上げた。それに比べて第2幕は、実際の歳を考えると脱帽ものだが、弱声部で数回声がかすれたブリュンヒルデのニーナ・ステンメと、代役を堂々と務めたものの、ヴォータンには多少役不足なラングレンを応援しながら聴く恰好となった。フリッカのエカテリーナ・グバノヴァは《ラインの黄金》よりも好演した。不安要素をうまく処理しながら、最終的には豪華な歌手陣の饗宴となり、長丁場を、最後には気が狂ったように振り切ったペトレンコと共に、歌手たちは何度もカーテンコールに呼び出された。後半の2演目も期待される。(1月22日所見)

■INFORMATION

バイエルン国立歌劇場《ニーベルングの指環》
(指揮)キリル・ペトレンコ(演出)アンドレアス・クリーゲンブルク

◎序夜《ラインの黄金》

(日時)1月11日19時/13日18時(会場)ナツィオナルテアター(出演)ヴォルフガング・コッホ(ヴォータン)、マルクス・アイヒエ(ドンナー)、ディーン・パワー(フロ)、ノルベルト・エルンスト(ローゲ)、ジョン・ランドグレン(アルペリヒ)、ヴォルフガング・アブリンガー=シユベルハツケ(ミーメ)、アレクサンドル・ツィムパリュク(ファゾルト)、アイン・アンガー(ファフナー)、エカテリーナ・グバノヴァ(フリッカ)、ゴルダ・シュルツ(フレリア)、オッカ・フォン・デア・ダメラウ(エルダ)、エルザ・ベノワ(ヴォークリンデ)、レイチェル・ウィルソン(ヴェルグンデ)、ジェニファー・ジョンストン(フロースヒルデ)

◎第1日《ワルクユーレ》

(日時)1月19日17時/22日17時(会場)ナツィオナルテアター(出演)サイモン・オニール(ジークムント)、アイン・アンガー(フンディング)、ジョン・ラングレン(ヴォータン)、アーニャ・カンペ(ジークリント)、ニーナ・ステンメ(ブリュンヒルデ)、エカテリーナ・グバノヴァ(フリッカ)、ダニエラ・ケーラー(ヘルムヴィーゲ)、カレン・フォスター(ゲルヒルデ)、アナ・ガブラー(オルトリンデ)、オッカ・フォン・デア・ダメラウ(ヴァルトラウテ)、ヘレナ・ズパノヴィチ(ジークルーネ)、ジェニファー・ジョンストン(ロスヴァイセ)、ハイケ・グレッツィンガー(グリムゲルデ)、レイチェル・ウィルソン(シュヴェルトライテ)

※両方とも7月にも公演あり。